「さあ、村上先生のやうに並びなさい」

と、いへば、どういふものか、子供たちはおとなしくしやんと正列するのだつた。これこそほんたうの教育者だと、私は何度も心から感心させられた。

先生が亡くなられた時、校長先生は、

「自分の親に死なれたやうにがつかりしてしまつた」

と、しみ〴〵なげいてをられた。人一倍の御指導を頂いた私は何時も先生の靈前にお水を上げる時、立派な仕事の出來ますやうにと誓ふのである。

（附錄）

# 越えて來た道

## 子供たちの望み

今よりずつと何年も前のこと、私がはじめて養護室で働くやうになつて感じた事は、此處の教育的な雰圍氣と病院生活の醫學的な雰圍氣の違ひだつた。病院の看護婦としての務めは、世間の人から白衣の天使などいふ名前で呼ばれたりして感傷的な娘らしい夢を多分に持つてゐて、月の美しさに涙を流したり、理想の結婚生活を胸に描いたり、明日の患者への仕事を手落なく準備する事などだつた。先生たちに叱られないやうに心配したり、惡口を云はれないやうに注意して、自分の教養としては看護學より他には別に必要も感じな

かつた。

それが養護室で仕事をするやうになつて痛切に感じたのは自分の教養の低さだつた。醫學的な知識は五ケ年の間に理論と實地で習つてゐるので、それ程苦勞しなかつたが、教育的な知識や總ての點の常識や教養の乏しさに氣がひけて、日々の仕事が辛かつた。養護室で子供とのつながりが深くなるにつれて、惱みは增すばかりだつた。

「看護婦さんは女學校を卒業したの？」

と、無邪氣な子供の質問に私はちくりと痛い胸を刺される思ひがした。子供たちにとつては、女學校はあこがれの世界であり、自分の理想を私にも求めたのだつた。小作人の娘、の私は、高等小學校三年を卒業させてもらつただけでも感謝しなければならないので、女學校入學などは遠い夢の世界だつた。當時は村で何々と家號のつく一二番と云はれる地主の娘たちでなければ、高等科三年さへも卒業させられなかつた。成積がよかつたため、私は父母の親心から、無理算段をして卒業させてもらつたので、今、女學校に行かなかつた事をどんなに惱んでも、それは親の罪ではなかつた。暗い中から野良に出て働いてゐる父母に感謝の氣持で一杯で、長い間產婆や看護婦としての勉强をするためにも、少なからぬ送金してもらつた事を考へると涙の出る程すまない氣がする。

「私も女學校へ行くの」

「私もよ」

「うちの姉さん、縣立へ入つたから、私も縣立へ入るの」

「あんたは何處へ入るの」

「私も縣立よ」

「あの人、あんなに出來ないのに縣立へ入るんだつて、をかしいのよ」

「看護婦さんは何處の女學校を卒業したの」

「縣立でせうね。私たちと同じやうに」

子供たちは私を自分たちのあこがれの女學校の卒業生にしてしまつた。子供たちのあこ

がれや希望を毀したくなかつた。自分達の學校の看護婦は、女學校を卒業した、と誇りたい氣持を破りたくなかつた。それを思ふと私は溜息をもらすのだつた。

女學校卒業といふ事は子供たちの願ふやうに、この養護室では實際必要であつた。私は日頃懷いてゐた理想をどうしても實現せずにはゐられない立場になつた。私はあなたたちの望む通り、女學校を卒業したのだとはつきりと云つてやりたかつた。そしたらきつと眼を圓くして、やつぱりさうだつた、とうれしがつて抱きついて來るに違ひなかつた。子供たちの純眞な鏡のやうな世界を曇らせるのは苦しかつた。私は子供たちとの約束を果すために、もう人妻でありながら、晩學でも學問にいそしまうと決心した。

女學校卒業は或は形式的な事かも知れないが、とにかくそれだけの基礎的な敎養は養護室では是非必要だつたのである。

## 妻の勉强

高等小學校を卒業して、それから約八年間私は自分の獨立した職業（看護婦と產婆）の勉强で一杯だつた。その間に結婚して、世の中の事と妻としての勉强は少しわかつたけれども、分數や代數や國語などの事はすつかり忘れてゐた。何處から手をつけてよいか途方に暮れた。女學校の敎科書を買つて見ようか、それとも女學講義錄を送つてもらはうかとも思つたが、やつぱり女學講義錄を買ふ事にしようと思つて、夫に相談した。

「ほお、お前がこれから勉强をはじめるつて。やれるかい。なか〳〵むづかしいよ。學校を出て直ぐなら頭も出來てゐるからよいが、妻の勉强では家の事と職業の事で精一杯ではないか。後で病氣になつてもおれは知らんよ。しかし勉强する事は大賛成だ。お互のやうに學校に行かないものは何時でも努力してゐないと後れてしまふから、大いにやれよ」

思ひの他の夫の言葉に、私は天にも上る氣持だつた。今日から女學校一年に上つた氣持になり、何もかも忘れて勵まうと、裏長屋の二階で誓つたのは二十六歳の春だつた。

そのうち友達にも勵まされ、喜ばれて夜昼となく勉强した。一番困つたのは數學だつた。

理科も大變で、鑛物、生理衞生、植物、動物、化學、物理と本を並べただけでもうんざりした。歷史も同じ事で、日本史、東洋史、西洋史、名前のわかり難い東洋史や西洋史には參つてしまつた。家事もあれば、裁縫は理論と實地、その他に體操まで入つてゐた。

まだ露のしつとりと深い薄暗い朝、校庭のクローバの中で蟲の音を聞きながら、數學の問題を解いた事もあつた。疲れた頭を休めようとクローバの上にねころんだまま、ピアノの音を聞いたり、柄にもなく俳句を作つて氣分をまぎらさうとした事もあつた。或時ふとオルガンを買ひたいと思つた。固い本を讀んだ後など、知らなくとも唯オルガンを奏いて見たら何か知ら氣分が和らぎさうだと思つたので、夫に相談した。

「この二階のあばら家に、オルガンを買ひこむなんてお前も物好きだなあ、固苦しい受驗生活をしながら、そんな事を考へるなんて。まあ貯金をみんなおろして買ふんだね。それならよからう」

かう云つて賛成してくれたので、私はうれしかつた。みすぼらしい世帶道具の中へ六十圓のベビィ・オルガンが運ばれた時は二人とも顏を見合せて笑つた。

「今度引越す時はこのオルガンが先頭だね」

このやうに苦しい勉强ではあつたが、樂しい勉强でもあつた。月の夜、燈を消して荒城の月を奏いた時などは、勉强の苦しさもすつかり忘れてしまつた。

やがて第一回目の試驗で家事、修身に合格し、最後まで殘つたのは歷史、地理、數學だつた。一回、二回、三回と度重なるにつれて、さすがの夫も、

「もう止めたらどうだ。お前の苦しんでゐるのを見ると、おれまで苦しくなつて憂鬱になるよ。大概飽きた頃ではないかね」

と、たまりかねて云つた。家へ歸つても、妻の勉强のためにじめ〳〵した家庭の空氣がたまらないらしかつた。私も次第に憂鬱になつて來た。妻となつてからの勉强はやつぱり苦しかつた。

學校の子供たちとの約束を果すため、また職業上の教養を得るための勉强と、家庭生活

との間に私は板ばさみになつて苦しんで、勉強どころではない時もあつた。家庭生活に歸らうか、學校生活を活かさうかと色々考へた末、たどりついたのはどちらも生かす方法だつた。それから後は家庭へ歸つてからは、勉強の事は口にも出さないことにきめた。私は學校か、道を歩きながらか、勉強することに決めた。

「葛西さん、勉強するより、旦那さんにサービスする事が大切だよ。早く歸つてお酒の一本もつけてあげるんだなあ」

と、背中を叩いて歸る男の先生たちの言葉に、ほんたうだとうなづきながら、養護室の机の上で地圖を畫いてゐた。笑ひさざめきつつ、仕事を終へて歸る先生方の聲を耳にしながら、せつせと一頁でも多く讀んで憶えて置かうとしてゐるうちに、はやもう暗くなりかけたのに氣づいて、夫より少しでも早く歸つて、食卓をにぎやかにしたいと、風呂敷包を背負つて走り〳〵歸らねばならなかつた。

このやうにして裁縫の實地の試驗の時は、心も身體も疲れ果てて、心臟がどき〳〵して、目がくらみ卒倒しさうだつた。この縣の受驗者は何時も女子は私一人で、男子は三十名程あつた。あの眞劍な獨學者の試驗場での態度には何か胸に迫るものがあつた。一回、二回、三回、五回とかかつて、みんなが私の勉強してゐるのを忘れる頃、やつと合格した。

「葛西さん、おめでたう」

「なんです」

「呑氣なんだね」

「どうしたのです」

「官報見たでせう。合格ですよ。東京電話で今日發表でしたよ。それもあなた一人しか合格してゐませんよ、男女合せて靑森縣では」

「それ、ほんたう、うそ〳〵、私今年は難關でしたもの。苦手の科目ばかりでして」

「うそだと思つたら、新聞見なさい」

私は急いで開けて見た。あつた。あつた。私は新聞を抱いて拜んだ。涙が後から後から

と盛り上つて來た。

文部省から合格證書が來て間もなく私は長女妙子の母となつた。

「お母さんは二十八になつて女學校を卒業しましたよ」

かう云ひながら、私は子供の顏の上に涙をこぼした。

## 先生になつて欲しい

「看護婦さんは先生になればいいなあ

「ほんたうになつてよ。そして私の方の先生になつて頂戴。私たち、うんと勉强するから」

「私の方の先生、おこるんだもの、私大嫌ひ。それに出來る人にひいきするもの」

「今日先生ゐないから、來て教へてよ」

このやうに五六人の子供たちは私を取り卷いて甘へた。この子供たちは叱る先生を嫌つて、やさしい先生がよい先生だとばかり思つてゐるのである。私はあまり叱らない方なので、こんな人が自分の先生になつたらよいと思つたに違ひなかつた。子供と仲よしになつて思ふ事は、やはり教育と云ふことの一通りを知つて置かなければならないといふ事だつた。一度は教員となつて自分の全身全靈を打ち込んで教化に從事する事が必要であつた。教育全體の中の一部である養護の仕事は、全體を知つてはじめて立派に完成が出來るのだと日一日と强く感じはじめた。それは私のやうなものには手の屆かない程むづかしい仕事には違ひない。けれどもやりとげなければならないと思つた。

私は子供たちの望んでゐるやうな先生にならう。そして得た力で養護室の子供たちを生かさう。子供たちも養護され乍らも喜んで一頁でも本をこの室で讀んでくれるやうになるだらうし、私もまた健康のことばかりでなく學科のことについても何についても相談相手になれようと思つた。私の背中にはまた固い教科書が結びつけられるやうになつた。大抵の師範學校出の人達は、私の年頃になれば、もう恩給をつけるによい年頃なのに、三十歳の母の勉强はまたかうして續けられた。專檢の勉强のやうに科目は多くないが、教育學の難

解な專門語にはいくら讀んでもわからない事があつた。殊に論理學には一番苦しめられた。

その頃夫は或る事情で職を失なつてゐたので、私の僅かな俸給で、親子四人が暮さなければならなかつた。ちやうどその時、子供は病氣になるし、運の惡い時は泥の中に足を滑らしたやうに續くもので、する事なす事うまくゆかなかつた。苦しまぎれに夫は柄にもない仕事に手を出したりして、あせればあせる程、經濟的には困難するばかりだつた。私は子供を背負つて生れてはじめて、質屋ののれんをくぐらねばならなかつた。

「母さん、どこへ行くの」

口の充分まだ廻らない子供に聞かれるのが一番辛らかつた。

「母さんはいゝ所へ」

子供ながらも、不思議に思はれたであらう。このやうに家庭の惱みで精一杯なので、勉强などは止めようかと何度思つたか知れなかつた。

しかし、どうしても一度は教師としての資格を得て教壇に立たなくては、養護室の責任者になり得ぬやうに思へて仕方がなかつた。やつぱりやり遂げよう、どんなに苦しい事があつても、人事をつくしてみよう。この身體の續く限りやり拔いてみようと決心した。

八月の眞夏の暑さは師範學校の手工室にも押し寄せて、拭うても〳〵汗がぽた〳〵と流れた。

「ちよつと、皆さん、顏をなめて見て。とても鹽からいのよ、汗つてやつぱり鹽分が含まれてゐますね。瀧なす玉の汗の水分が天に蒸發して鹽分だけが我々の顏の表面に殘つたといふ譯ね。この鹽分も尊い我等の努力の結晶よ。ああ、我等の神よ我等を憐み助け給へ」

こんな笑談口をきき乍ら暑さも時も忘れはてゝ見える若い娘たちは朗かだつた。このやうな女學校を出たばかりの娘達の中で私だけが三十歳のお母さんだつたが、わが年の事もつひ忘れて氣も若々しく朗かになつた。

「今年は手工だけでも合格してくれるやうにお祈りしませうよ」

「あなたなんか、自信大ありつて顏をしてゐますよ。お祈りなんかしなくても大丈夫」

「うそ〳〵、御自分の事は棚にあげて。厚紙細工だつて糊はべた〳〵だし、木工ではでこぼこだし、手工と來たら猫の手に餅つて鹽梅だね、自信なんかあるものですか」

「私ね、今年合格しなかつたら、津輕海峽に御だぶつするの。その時は袖の振り合ひ多少の緣とやら、ああ悲しいかなと合掌して下さいね」

みんなどつと笑つた。

このやうに受驗生は今年こそは、今年こそは、と必死の勉强を續けるのだつた。私も遲れ走せながらこのマラソン競走に馳せつけたのだつた。

試驗期近くなつて圖書館に籠つて勉强してゐると、小使さんが「お客さんです」と、云ふので、走つて行つて見ると、子供と女中がしよんぼりと立つて迎へに來てゐるのだつた。私は風呂敷包に袴を包んで、そそくさと子供を背負ひ、晝の淋しさを補つてやりたいと氣をくばるのだつた。二度、三度と度重ねる受驗に、私は新聞の文字が見えなくなる程疲れてしまつた。今年こそはとはりきつても、實地授業に立つても、實際に學級を持つた事のない私は失敗を繰り返すばかりだつた。

「今日は妙子の誕生日だから、何かこしらへて祝つてやつたら」

かう夫に注意されて私ははつと氣がつき、お餅を作つてやる事にした。

外から歸つて來た夫は、憂鬱な暗い顏をしてゐた。

「お前、また今年もだめだよ。あんまりがつかりするなよ」

「ほんたうですか、今年こそ大丈夫かと思つてゐましたが」

「今日の新聞に試驗の結果が出てゐたが、その中に入つてないよ」

私は悲しくなり、泣けて、泣けてもうお餅をこしらへる勇氣もなくなつた。

「母さん、どうしたの、お腹痛いの」

といふ子供の言葉に一層悲しくつて、床をとつて寢てしまつた。かぶつたふとんの下で思ひきり泣いた。

「なに、來年は文檢でもやつて見るさ。その位努力したらきつと通るよ。何時ものお前に似合はない弱虫だなあ。妙子、母さんの弱虫つて笑つてやれ」

かう云つて勵ましてくれる夫の氣持を考へると、いつそ消えてなくなりたいと思つた。今年こそ人に賴らない事にしよう。自分の全力をあげて日本一のよい教師だとの自信を持ち、あの附屬の生徒たちを自分の學級の子供だと思つてぶつつかつて行かう。合格不合格は神樣が決めてくれようと考へた。

そして次の年にやつと通つた。初等科本科訓導と本科訓導の教育の科目に合格したのだつた。

養護訓導としての仕事を完成させるための私の理想はまづ第一階段に入つたのである。

## 學校視察

弘前市のある學校に私たち一行六人が視察に出かけた。學校看護婦の視察はめつたにない事で、他縣からもまだ一度もなかつた。

「あなたは授業よりも衞生方面を見て來て下さい」と、出發の時校長先生の御話だつた。

弘前は美しい落ちついた町だつた。

「とてもいいわね、朝のラヂオ體操もまた美しいわ。すばらしい學校だなあ。こんな學校で授業すると、長生きするわ」

「校長室のお花がいいわね」

私たちはこんな事を話し合ひながら見とれてゐた。こちらの先生方の和かな御挨拶も私たちを喜ばしてくれた。

一通り教室を見せて頂いた。私はやはり子供たちの手足や首の事が氣にかかる。爪はよく切つてゐて、私の方より徹底してゐた。姿勢は私の方よりずつと惡い。離れてくらべて見ると、よい事も惡い事もはつきりとわかつた。掃除もずつとゆきとどいてゐなかつた。

學校給食の調理室をのぞいて見た。三人の女の人がせつせとライスカレーを作つてゐた。

三百人以上に榮養給食をしてゐて、偏食の子供などもあるであらうが、食べ殘したりする者は一人もないといふ話である。一人分十二三錢だとの事だつた。施設その他に相當費用もかかるだらうが、是非私達の學校でも設置したいものだと羨しく思つた。さうしたら偏食の問題も缺食の問題も食時中のしつけも一切解決出來ようと考へた。

養護室へ行つて見ると、養護婦さんが二人ゐた。綺麗に掃除された中に病院の看護婦さんのやうに白衣を着てゐた。何となく賴まれて臨時に學校に來てゐるやうな氣がするので、やつぱり紺色か何かの作業服の方がよいと思つた。この人達もそれを望んでゐた。職員室と別世界で、殆んど先生方とは交渉がなく、職員會議にも出ないし、めつたに口もきくことがないと云つてゐた。ずゐぶん不平もあつて、聞くのがつらかつた。同じ教育の仕事に携り、その一部を擔うてゐながら、別扱ひをされると云つて悲しんだり、ひがんだりしてゐる。何とかしてこんな惱みを早く解決しなければと思ふ。これはこの人達ばかりではなく、全體的の惱みである。心に不滿を持つてゐて具合よく行くはずがない。お互に手を握り合つて進んでこそ、萬事具合よく運び、教育も徹底するのだとつくづく思つた。

お互に辛抱强く勉强して、私たちの道を切り拓き、向上させませうと、一心に話してゐるうちに、他を廻つてゐた先生方もみんな集つて來て、和かな雜談に花を咲かせた。

そして今迄は養護室を見に來られた人は一人もない。今日は皆さんが來て下さつてほんたうにうれしかつたと喜んで頂いた。

## 私の失敗

養護室には私の訓練事項が貼られてあつた。下手な字ではあつたが、自分の手で書きたいと思つたので、書の上手な先生にもお賴みせず、一所懸命書いたのだつた。何處の養護室でも氣のつく事は、禮儀の正しくない事と言葉のぞんざいな事だつた。「養護室の挨拶」にも書いたやうに教室と養護室では裏と表の相違があつた。せつかく教室で熱心に教へられたことも、ここへ來て一度に毀されては教育も臺無しである。何處であらうとも實踐す

るのが教育の本道だと思つて、私も時々主張した事もあつた。子供たちの中には受持の先生か校長先生でなかつたら、朝の「おはやう」をしなくてもよいと思つてゐるものがあつた。まして養護室などでは、しないのが當然だと思つてゐるのが多かつた。それは尊敬の念の厚薄から來る現はれでもあらうが、根本は形式的な教育の缺陷に違ひなかつた。

或る日こんな事があつた。その前日、市内の養護訓導たちが集り、私たちの手によつて養護室の子供の言葉やしつけをして見ようと相談し、校長先生や他の先生たちに協力していただく事にした。ちやうどその翌日になつて、市長さんが、小學校の教師たちの眞劍な努力を實際に見たいとの事で、朝早く我が校にお出でになつた。校長先生はじめ職員たちから小使さんに到るまで、みんな緊張して日頃の努力をお見せしたのだつた。ところがちやうど養護室を視察の折、腹痛の子供をつれた四年生の男の子供が二人入つて來た。そして市長さんや視學さんや校長先生の多勢をられる前を何時ものやうに何の挨拶もしないで、どたばたと通り過ぎた。校長先生はたまりかねて、「おい、おじぎを忘れたのかね」と、てれくささうにその子の頭をなでられた。私もはづかしいやら、じれつたいやらで、身のちぢまる思ひをした。

或る年の選擧に、我が校が會場にあてられ養護室が市役所のお役人の控室になつた。前に嘗めた苦い經驗から、今度は手落のないやうに次のやうな貼り紙をしたのだつた。

「世界中で一番丈夫な子供になりませう」

「御國のために役に立つ子供になりませう」

「オハヨウゴザイマス、サヨウナラヲイヒマセウ」

一年生にもわかるやうに、最後の項は特に片假名で書いて、私は何か氣負ふやうな氣持だつた。

夜遲く歸つて來た夫は、いきなり私を頭からどなりつけた。

「お前は文法を知らないのか。あんなに受驗時代に、勉強したくせに。明日の朝、暗いうちに行つて剝いで來い」

私はかうがみ〳〵どなられても見當がつかなかつた。

「なんの事ですか」

「なんの事つて、おれは今日穴へでも入りたいやうな思ひをしたよ。麗々しく貼つたのはよいが、オハヨウなんて一年生の先生が教へてゐるかどうか考へて見たらどうだ。先生が熱心に子供たちにオハヤウと何度も何度も教へて憶えさせても、お前がオハヨウと書いたら滅茶苦茶ぢやないか。市役所の人たちが、あれを見てゐて、學校の先生も案外間違つて書いてゐるなあと笑つてゐたよ。お前だけではない。學校全體の恥になるんだ。今後はよく考へて書くんだよ。朝早く行つて剝いで來い。サヨウナラも何もあつたものではない」

妻の失敗のために受けた夫の屈辱の餘憤に私はつきさされる思ひがした。その日私は午後から頭痛がして熱が三十九度ほどあつて、翌日は缺勤しようと思つてゐたが、今はそれどころではなかつた。私は自分の責任を考へると身ぶるひがした。一睡もせずに夜の明けるのを待ちかねて、學校に出かけた。疲勞と頭痛のためにともすると倒れさうになる身體を必死に支へながら、夫の言葉に感謝した。勉強しよう、實力を造り上げよう。今となつては、養護訓導として子供たちに一段低く見られる不滿よりも、まづ自分が教室の先生に劣らないだけの立派な教養を積むのが、私の第一の務めだと知つた。文章の事にしても、私はその後文法を一通り知つてからでないと、決して掲示や何かを貼り出さない事にした。

## 養護訓導養成所

何か御話しをせよといふ電話だつたので、養成所の門をくぐつた。

去年の八月にはこの學校で養護訓導受驗準備講習會を十二日間受講した。その時、長女からこんな手紙が來た。

母さん、がんばりなさい、母さんは級長さんですつて、萬歲。陽子も私も一所懸命勉強してねえやの云ふ事をよく守つてゐます。お父さんは晩に早く歸ります。御身御大切に。

妙子より

合宿生活をしてゐた私はこれを讀んで笑つたが、母さん、がんばれと激勵された人は私の他にも可なりあつた。息子が大學に行つてゐたり、娘が御嫁に行つて孫があつたりした人もあるので、四十以上の人も何人かあつたに違ひない。

時代の動きで養護の必要、體位の必要が高唱され、多年の懸案であつた養護訓導の制度が本極りになつた時だつた。その思ひ出深い學校に今年は講師として招かれたのだつた。

この養成所の設立は鳴海先生の御盡力によるのだと蔭ながら御聞きして私達は何と感謝してよいかわからなかつた。そして私たちの手によつて幾分でも御手傳ひ出來たら、こんなありがたい事はないと考へた。この學校から一人でも多く立派な養護訓導が生れるやうにと思ふと、今學んでゐる生徒たちの樣子が一刻も早く見たくなつた。受持の女の先生に連れられて教壇に立つた。

まだみんな若い娘さん達で後一年で卒業して養護訓導になるのかと思ふと、何となく心細い氣がした。養護訓導としての仕事は今初まつた許りである。今までの看護婦から教育者としての先生になつたとは云へ、まだ入口が切り拓かれたばかりだ。續く人々はいばらの道を覺悟しなければならない。さうして社會の期待に背かないやうにしよう。私は叱つたり、教へたりしてゐるうちに、二、三人居眠りをしてゐる娘達があつた。私の話が下手なのは覺悟してゐたが、こちらがこんなに眞劍になつてゐるのにと情なかつた。なかには一つ一つうなづいてゐる生徒もあつて心強くも思つた。まだ心殘りではあつたが、豫定の四十分が過ぎたので、お別れした。

受持の女の先生は大變喜んで下さつて、

「あの娘たちは氣力がないので困つてゐます。まだ採用するかしないかわからないやうな市町村の負擔俸給ですから、はつきりした信念が生れないでせうか、どうも困つたものです　でも今日は氣合をかけて頂いてさつぱり致しました。餘程こたへたらしいやうです。折角骨折つて下さる鳴海先生にもあのままではお氣の毒です。私も學校を出たばかりでこちらの學校へ來たものですから、よくはわかりませんけれど」

から云はれると、私も何だか心細くもなつたけれども、まだはじまつたばかりであり、どうか立派なしつかりした人に育でて下さいと一所懸命御願ひしてお別れした。

## 思ひ出

沖館校に居た頃のことであつた。

ある日子供の一人が突然私に訊いた。

「看護婦さんは英語知つてゐるの」

と。そしてその子供は「うちの姉さん知つてゐるよ。晩になるとキャットだのドッグだの私に教へて呉れるの、とつても面白いよ」と云ふ。するとその傍に居た子も負けないで、

「うちの兄さんも、晩になれば、何だか、ペヤだのホルスだの何だと、いろ〳〵教へて呉れるよ」

と云ふ。その頃、今日の米英との戰を誰れが豫想したらう。その時分はそのやうな空氣だつた。横文字が讀めると云ふことに、誰れもがあこがれを感じて居たのである。

私は、何とかしてその英語を勉強したいと思つた。そして、決心して、夫と一緒にある英語講習會へ勉強に出たことがあつた。そこの老先生は、何でも大河内傳次郎を教へた事のあると云ふ、古い帝大出の文學士だつた。その先生は何か人生に失敗されて、孤獨な身を本州のはてに運んで來たのだと、自分で述懷されたことがあつた。私はあの齒のもうまばらになつて居た先生の顏を忘れることが出來ない。又、その頃、一緒に教はつた人々にはお醫者様も居たし、事務員も居たし、職工さんも居た。そして、無料で使用出來る教會堂が、その講習場であつた。

煙いストーヴ、寒くてガランとした室、今でも思ひ出せば寒む〳〵と寒さを覺えるやうである。

ある日、小さな子供達と手をつないで學校から歸途についた。一人の子供が突然、

「看護婦さん、お嫁に來ないの」

と訊かれて吃驚した。

「どこへ」

と問ひかへしたら、その子は大眞面になつて、

「うちへ」

と云ふ。

「あんたの家で誰れにお嫁さんを貰ふの」

と、たゝみかけると、

「たれにでもないの、私と遊ぶの、お手玉をついたり、かけつこしたり」

と、たわいも無い話で二度吃驚させられた、と云ふよりも吹き出して了つたことであつた。

私の年齢の事も、何も考へない、大人の常識や想像を越えた世界がそこにあることを知らされた。

何時であつたか、前に書いた三分に

「ナ、ドコサモイグナ」(なあ、お前、何處へも行くな)

と云はれたとき、三分の純情にホロリとさせられて、

「何處へも行かないとも、行かないとも」

とつひ誓つて了つたことがあつた。その何處へも行くなと云ふ意味ははつきりわからなかつたけれど……。

ぬるかみの多い街はづれの道、雪解の頃などには殊にそれが激しかつた。

家庭を持つ身なので、朝の出勤時間もおくれ勝ちなのを氣にしながら歩いてゆくと、汗が流れて來る。長袖に袴、とても歩きにくかつた。

ある日、そのやうな道を歩いてゐたら（それは營林局の前あたりであつた）一人の子供が私を見つけて叫んだ。

「あ、看護婦さんだ」

すると前をぞろ〳〵と列を立てて歩いて居た子供達が一齊にふりかへつた。

「これ、これ、みんな看護婦さんにかいどコ（街道―途）つけてくれるべあ」

と云つた子があつた。すると泥だらけのぬるかみを、皆が、小さなゴム靴で、せつせとかき分けて呉れはじめた。

私は、その中心に、何時か頭の虱をとつてやつた女の子がねるのを知つて思はず顔を横にむけて、頬に流れる涙を見せまいとしたことがあつた。

× × × × ×

これは又、この頃のことである。

長い戰爭が子供達にいろ〳〵の印象を與へてゐる。

子供達の中には、自分の兄が出征して居るのが少くない。そんな事も手傳つて、私に「赤十字社の看護婦になれ」とすすめたり、私が看護婦であるのに、戰線へ出ないのが不思議だと思つて居るのもあるらしい。

男の子が兵隊になりたいのは當然の事であり、女の私に從軍看護婦となることを求めることも亦當然のことであらう。

私は、何かにつけて、自分の教養の足りなさをつく〴〵と感じさせられて仕方が無い。子供達に接すれば接する程、自分の修養の未熟さに愛想がつきる思ひがする。女としての一通りの身だしなみを何とかして身につけたいと思ふ。

病む人の枕頭に飾る一輪差しに投入れる花にしても、お花の心得のある人と、無い人とでは大變な違ひである。その實際を何かで見るたびに、そのやうな事を考へさせられるのである。

私はあるとき、同じ仕事に携る人々の中でも、一番進歩的で又、仕事にも熱心な柿崎さ

んに相談して、お花の稽古を企てた。數名の同志を與へられて私達はお花を習ひはじめた。いろ〳〵の批評もあつたが、その事は決して無駄でも、無意味でもなかつたやうである。

學校には年々若い助教の先生が見えられた。女學校を卒へられたり、中學校を出たりされたその人々の年齢は、私と親子と云ふ程でなくとも、それに近い程違つて居たが、勉強する上では、同じ若さのつもりで居られるので、私は心やすくなり得た。その方々は何かにつけて、資格を持たぬと云ふ事で、悲しんだり、時々はひがんで見えることさへもあつた、視學さんが見えられる時など、特に——。

然し、私は自分が、同じ無資格者で、勉強中であり、受驗中であることから、お互に相談し合つたり、お互に志を訴へ合つたり出來た。それが、少しは若い方々の慰めになり、勵ましになつたかと思ふ。

その時一緒に勉強した方々に、何處かの學校へ視察に出かけたりして、ひよつくり出會すことがある。

「葛西さん、しばらくでした」

と、今は見違へるやうに立派になられた方々を見ることはほんとにうれしい事である。又その方が、時々養護室に今もなほくすぶつて居る私をお訪ね下さるやうな折には、私は、何とも云へない感激と感謝に溢れるのである。

× × ×

× ×

卒業した子供で、ひよつくりと訪ねて來て風呂敷を一枚手土産に吳れた子があつた、その子が、養護室をなつかしんで、遠い北海道で女中奉公をしながら働いた貴い汗の代で求めて持つて來たその風呂敷には、何とも云へぬ眞心が感じられた。

思ひ出は子供達ばかりではない。私が家を持ち、仕事を持ちつゝいろ〳〵の勉強をなし得たのは、皆、それ〴〵の學校の校長先生はじめ、先生方の御理解と御同情によることで

ある。こんなつまらぬものを認めて、自分の恥をもさらけ出しても世に訴へたいと願ふのも、皆様の御恩に幾分でも酬ひられようかとの願ひもあるからであつた。

養護室記錄
【定價一圓四十錢】

昭和十八年二月十五日初版印刷
昭和十八年二月二十日初版發行

文協承認番號
あ380127
(5000部)

著者　葛西タカ
東京市神田區三崎町一丁目二番地

發行者　長崎次郎
東京市牛込區早稻田鶴巻町三〇八番地

印刷者　太田三惠子

印刷所　大庭印刷所
(東東三五六)

發行所　有限會社　長崎書店
東京市神田區三崎町一丁目二番地
(文協會員番號一二一五一三)
振替東京七一八八六番

配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給會社

276
847

NAGASAKI